

ネパール地震救援

救急病棟看護師 花原 由紀

2015年4月25日、ネパールでマグニチュード7.8の地震が発生し、8,700人以上が犠牲となりました。私はERUチームの初動班として、4月29日から6週間、救援活動を行いました。

中でも被害の大きかった、シンデュルパルチョーク郡メラムチ村のクリニックで活動をしていました。

元々このクリニックは、7つの村の25,000人の住民をカバーしており、この地震で村の9割が損壊し、発災3日間で1,000人以上が担ぎ込まれ、うち300人がヘリ等で大きな病院へ搬送されました。クリニックの建物自体は無事でしたが、クリニック内は物が散乱し、来院患者数は普段の2倍以上である一日に200~250が訪れ、うち約50%外傷患者でした。

中には、クリニックのすぐ横に、ブルーテントを張ってスペースを作り、家や家族を失った患者が生活していたり、また何時間もかけてクリニックに来る患者も多数いました。小さなクリニック内では患者があふれ、限られた環境、限られた物品の中で診療や処置、手術は容易ではありませんでした。

現地の医師やナースをはじめ、看護学生と協力し、クリニック内の環境整備、業務の改善、看護処置の向上に日々追われていました。

そんな中、5月12日に2度目の大きな地震（マグニチュード7.3）が発生しました。現地の方は、2度の大きな地震を経験したためか、建物内に入ることへの不安や恐怖心が更に募り、この日の午後は、クリニックの外で診療や処置を行いました。

日赤は、クリニック内だけでなく、クリニックがカバーする周りの村へ巡回診療も始めました。クリニックから山岳部にある各村まで車で片道2~3時間かかり、一日に80~100人、累計533人の診療にあたりました。

私は、今回の派遣が初めてで、この派遣を通じ大変多くの学びがありました。患者だけでなく、現地のスタッフももちろん被災者であり、私たち日赤の活動を快く受け入れてもらえたことが、とてもうれしく思いました。



子どもも多数受診した